福島のホテルなりしか幸綱氏と飛露喜を朝より飲みてゐる夢　伊藤一彦

この作者の今月の五首、前三首は小生と酒を飲む歌である。学生時代からのつきあいだから、半世紀以上、六十年近くいっしょに酒を飲んできた。このところしばらくは毎年、「心の花」全国大会、牧水賞選考会、牧水賞授賞式で、かならず少なくとも年三回は一緒に飲んできたと思う。ただ、福島で一緒に飲んだかなあ？「飛露喜」は福島の銘酒。二、三年前に、群馬県のみなかみ町で一晩飲んだけれど。

こゆるぎの磯野フネ女の年齢に追ひつきにけり赤紫蘇を煮る　山本陽子

今月の七首、枕詞や係り結びなど、古典和歌の修辞をもちいつつ現代を表現して斬新。「こゆるぎの磯野フネ女」はサザエさんの母フネさん。はからざるユーモアに思わず笑ってしまう。「こゆるぎの」は神奈川県大磯付近の海岸のことだが、「いそ」にかかる枕詞として用いられるようになった。古典和歌は、学校で教えるので真面目なものになってしまったが、遊び心が基本だったということを思い出させてくれる。

外気温そのまま我の体温となり釣り合ひが取れて動けず　梅原ひろみ

「いやあ暑い、たまらんなあ」という感じをそのまま短歌にした、不思議な一首である。体温とほぼ同じ、三十六度ほどの気温を思い浮かべればいい。

「歓声なき開幕」がいい1面のメイン見出しはすんなり決まる　加古　陽

八月八日のオリンピック開会式のニュースを、八月九日の「東京新聞」朝刊にどう活字化するか。その日の編集局の現場の空気を伝える貴重な一首。

降りたるも上がるも知らずビルを出で夕雲かがやく水たまり越ゆ　谷ちえみ

ビルの中にしばらくいた間に、夕立が過ぎて行ったのである。現代社会特有の外界からまったく遮断された空間ですごした不思議を、さり気なく作品化してうまい。

エアコンの効いた部屋から聴く蝉の鳴き声が好き他人事みたいで　平井麻奈

「他人事みたいで」の意外さにおどろいた。意表をつくというか、予想外の用語が新鮮にひびく。ふだんは森の中でじかに蝉を聞いている、のイメージだ。

落ちる前に夢は始まり眠れないわたしが夢に浮遊してゐる　松本実穂

睡眠に入る前後の、自分で自分がコントロールできない不思議な時間をクローズアップした野心作。初句「落ちる前に……」が斬新。

東京へ向かう尾灯を見送った駅も列車も今はもうない　青木雅一

送ってもらった新刊本（後に記す）によると、作者は一九六〇年生まれだから、四、五十年ほど昔の記憶だろう。ブルートレイン等今はなくなってしまった東京方面行きの列車は数多くある。駅は、さてどこだろう。刊行されたばかりの著書『高等学校国語科授業の探究ー短歌

短歌の現在

No.486　今月の15首を読む

佐佐木幸綱